

泉鏡花ゆかりの 逗子をめぐる旅

令和5年12月2日(土)

逗子市観光協会

134年前の明治22年、横須賀線開業に伴う「逗子駅」の開業によって、寒村・田越村（現在の逗子市）の近代化が始まりました。内外の実業家や政治家、役人、軍人、学者等々が、風光明媚・気候温暖なこの地を訪れ、有名な徳富蘆花や国木田独歩、永井荷風を始めとする文人墨客の中に、泉鏡花の名前もありました。

胃腸病の転地療養を兼ねて、2度に亘って、逗子に住み、その間、数々の作品を発表しました。

泉 鏡花

明治6年(1873)11月4日、石川県金沢市で、泉家の長男として生まれる。本名泉鏡太郎
父・清次は彫金師、

母・鈴は葛野流大鼓師・中田猪之助の末娘
昭和14年(1939)9月7日 没(65歳)
墓所は雑司が谷霊園。

幼少期は母から草双紙を読み聞かせられて育つが、明治15年、鏡花9歳の時、母(28歳)と

死別。 弟 豊春（泉斜丁）

・鏡花夫人 すゞ（旧姓伊藤、元神楽坂の芸妓）

明治14年（1881）～昭和25年（1950）没
（69歳）。

鏡花とは、明治32年（1899）硯友社新年宴会で知り合い、相思相愛の関係にあったが師・尾崎紅葉（※）に叱責され、一旦は別れ、紅葉の死後結婚し夫婦仲はよかった。

（※）師匠は 五歳年上の尾崎紅葉（慶応3年12月16日～明治36年10月30日）没（35歳）胃癌のため。

作家を志す

明治23年（1890）17歳の時、友人の下宿で尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」を読み感激し小説家を志した。翌明治24年10月紅葉宅を訪ねて、即入門を許され、玄関わきの一間で紅葉の原稿整理、清書、来客の対応、雑用など書生生活が始まり紅葉から信頼される。

明治25年（19歳）、京都「日出新聞」に紅葉の指導もあり「冠弥左衛門」を連載し文壇デビュー。明治中期から大正、昭和と長短300編あまりの作品を発表。

逗子と鏡花

・桜山に住む。明治35年（1902）8、9月。胃腸病のため静養。田越村大字桜山576番地（現）逗子市桜山5丁目4-7

・住まいの様子（鏡花全集28「逗子だより」）

「山續きに石段高く、木下闇苔蒸したる岡の上に御堂あり、観世音おわします、寺の名は観蔵院といふ。崖の下、葎生い茂りて、星影の晝も見ゆべきおどろおどろしければ、同宿の人たち渾名して龍ヶ谷といふ。店借の此の住居は、船越街道より右にだらだらのぼりの處にあれば、櫻ヶ岡というべきや」

・「起誓文」・「舞の袖」と「観蔵院」

滞在中に書かれた「起誓文」は観蔵院（別項）が舞台。

主人公月岡和夫は妻お静に観音堂（**観蔵院**）に起誓文を納め、西洋に絵の勉強に行く決心を明かし、逗子に残す年老いた両親の世話を頼む。

「舞の袖」では舞の名手であった留守を守るお静に、隣家の役人から舞を強要される。

しかし、お静の体を心配して断り続けた老親は窮地に立たされる。老親の危急を救うため舞扇を採ったお静……。

蓮沼山 観蔵院 天台宗

三浦三十三観音霊場 第二十三番札所

本尊：「十一面観世音菩薩」

（行基作と伝わる）

創建は不明、文禄年間には観蔵坊と

いい、元禄頃から院号を称するようにな

った。神武寺の末寺。

・逗子に住む

明治38年(1905)7月～明治42年(1909)2月。胃腸病悪化のため静養。

田越村大字逗子 954番地。

（現）逗子市逗子5丁目9-38

鏡花の住んだ明治38年頃の逗子は避暑地、保養地として有名になって、別荘が建ち、夏場は海水浴を楽しむ観光客で賑わいました。

鏡花の住んだ借家は、駅からほど近い二階建て二軒長屋の一方でした。

・住まいの様子

（久保田万太郎 「歌行灯解説」より）

『七月、ますます健康を害ひ、静養のため、逗子田越に借家。一夏の假すまひ、やがて四年越の長きに互れり。殆ど粥とじゃが芋を食するのみ。十一月、『春昼』新小説に出づ。

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

雨は屋を漏り、梟軒に鳴き、風は櫂の枝を折り

て、棟の柿葺き(こけらぶき)を貫き、破衾の天井を刺さんとす。蘆の穂は、霜寒き枕に散り、ささ蟹は、むれつつ壘を走りぬ。『春昼後刻』を草せり。蝶か、夢か、殆ど“李長吉は、その頃嗜みよみたるもの”とある。虐げられた先生。・・・目を閉じ、耳をふさいで、ひたすら通り魔のすぎゆくのを待たれた先生・・・何という哀しいすがただったらう。』

逗子と作品

明治 35 年 (1902)	11 月	「起誓文」
明治 36 年 (1903)	4 月	「舞の袖」
明治 39 年 (1906)	11 月	「春昼」
	12 月	「春昼後刻」
明治 41 年 (1908)	1 月	「草迷宮」
	4 月	「頬白」
	6 月	「沼夫人」 など。

「春昼」と「岩殿寺・まんだら堂」

『樹の枝から梢の葉へからんだような石段で、上に、茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朶の雲かと見える。棟に咲いた紫羅傘いちばつの花の紫も手にとるばかり、峰のみどりの黒髪にさしかざされた装の、それが久能谷の**観音堂**。我が散策子は、其処を志して来たのである。』

(春昼より)

海雲山 岩殿寺 曹洞宗

本尊「十一面観世音菩薩」

坂東三十三観音霊場 第二番札所

観音堂は養老6年(722)の創建と言われ、縁起によれば、徳道上人がこの地に下向された時に始まり、その数年後、行基菩薩がこの地を訪れ、徳道上人と同じく、瑞光を見て嶺に登り、大悲者の影向を見た由。

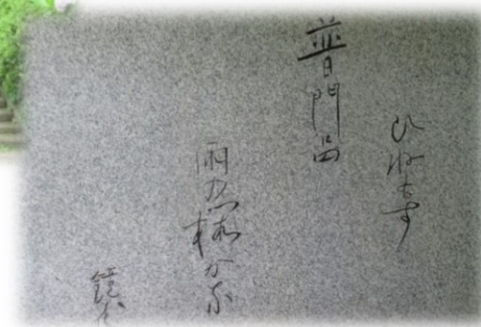
岩殿寺は、徳道、行基両聖人の開基といわれます。

大悲殿（観音堂）から逗子の海、遠く三浦、伊豆半島が一望できる絶景の地であることから、山号を「海前山」（現在は「海雲山」）また、岩窟が自然の殿堂のようであったことから寺号を「岩殿寺」としたといわれます。

吾妻鏡は頼朝、政子、二代将軍頼家、三代将軍実朝、頼朝の長女大姫の度々の参詣を伝えています。

鎌倉幕府滅亡後、寺の勢は無くなりましたが、江戸時代、徳川家康は配下の代官長谷川長綱に命じて境内を整備させ、堂宇が今のような形になったと伝えています。

観音堂脇には鏡花寄進の池（鏡花池）があります。



岩殿寺の句碑

ふもんほん
「普門品 ひねもす 雨の桜かな」

鏡花は、しばしば岩殿寺を訪れ、住職とは昵懇の間柄でした。

碑は檀家を中心に、住職、すゞ夫人や里見淳、久保田万太郎、鍋木清方など鎌倉文士、寺木定芳（鏡花門人）らの協力で昭和37年（1962）に建てられました。

配字りは里見淳が指示したといわれます。

『・・男はその囃子の音は、^{くさひとむら}草一叢、^{こだちひとうね}樹立一畝
出さえずれば、^じ直きにみえそうに聞こえます
ので。二足が三足、五足が十足になって段々
深く入るほど一。

ここまで来たのに見ないで帰るのも残惜しい
気もする上に、・・・

不細工ながら、窓のように、箱のように、黒い
横穴が小さく三五十と一側^{ひとかわなら}並べに仕切って
あって、その中に、^{おんな}ずらりと婦人が並んでいま
した。坐ったものあり、立ったものあり、片膝
立てたじだらくな姿もある。緋の^{ながじゅばん}長襦袢ばかり
のものもある。頬のあたりに血のたれているのも
ある。縛られているのもある、一目見ただけで、
それだけで、^{かすか}遠くの方は、小さくなって、幽に
なって、唯顔ばかり谷間に白百合の咲いたよう。
^{そっ}慄然として、遁げもならない処へ、またコンコン
拍子木が鳴る。すると貴方、谷の方へ続いた、
その何番目かの仕切りの中から、ふらりと外へ
出て、一人、小さな^{おんな}婦人の姿が、音もなく^{ある}歩行

いてきて、やがてその舞台へ上がったので
ございですが、其処へ来ると並の大きさの、
しかも、すらりとした背丈になって、しょんぼり
した肩の処へ、^{おとがい}こう、頤を付けて、^{じつ}熟と客人の
方を見向いた、その美しさ！

^{まさ}正しく玉脇の御新姐で・・・

釘づけのようになって、^{たちすく}立窘んだ客人の背後か
ら背中を摺って、ずっとでたものがある。
黒い影で。

見物が他にもいたかと思う、とそうではない。
その影が、よろよろと舞台に出て、御新姐と背中
合わせにぴったり坐った処で、こちらを向いた
のでございましょう。顔を見ると自分です。

「ええ！」

それが客人御自分なのでありました。

で、私へお話に、

^{ほんとう}（真個なら、^{そこ}其処で死ななければならんのでした、）
言って嘆息して、^{まつさお}真蒼になりましたっけ。

どうするか、見ていたかったそうです。勿論、肉

は躍り、血は湧いてな。しばらくすると、その自分がやや体を捻じ向けて、惚々と御新姐の後を見入ったそうで、指の尖で、薄色の寝衣の上へ、こう山形に引いて、下へ一ツ、△を書いたでございますな、三角を。』(春昼より)

まんだら堂やぐら群

「国史跡・名越切通」を構成する、「やぐら」群。鎌倉時代・13世紀後期から室町時代16世紀にかけて営まれた、葬送・供養のいこうです。

「やぐら」は150穴以上が確認されています。被葬者は、武士、僧侶、仏師などといわれます。

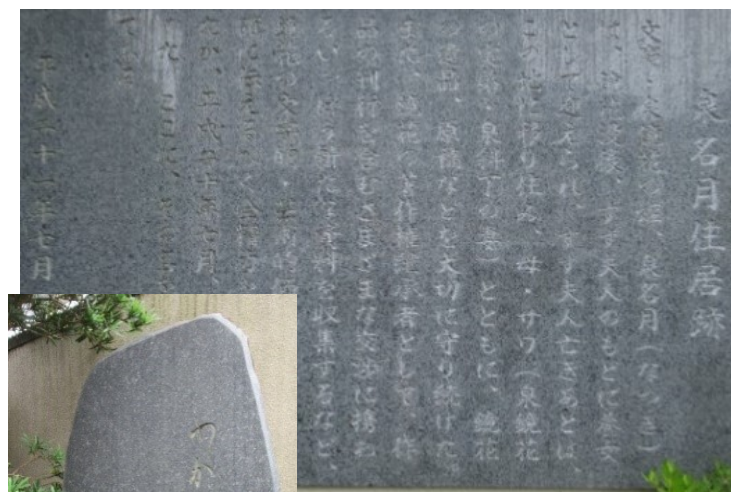


まんだら堂やぐら群

いすみ なつき 泉 名月 旧居跡

泉 名月 鏡花の姪、弟斜丁の娘。鏡花没後、すぐ夫人の養女となり、夫人亡きあとは、逗子市山の根に住み(昭和30年～平成20年)、母サワと共に、鏡花の遺品、原稿などを守り続けました。

碑は平成21年に建てられました。



わが恋は
人との沼の
花あやめ 鏡花

大崎公園の鏡花句碑

秋の雲

尾上のすすき

見ゆるなり

ススキが自生していた景勝の地・大崎公園に、ウサギを象った句碑が、平成2年に建てられました。

「ウサギ」について

母親から、「自分の干支から7番目の干支を集めると幸運が訪れる」と言って贈られた水晶のウサギは、生涯の宝物となり、終生ウサギのコレクションが続けられました。



大崎公園の句碑